

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

- 3-1：自然神学とは何か
- 3-2：自然神学と社会科学
- 3-3：自然神学の規範的場としての聖書解釈

4. キリスト教思想と経済・環境

- 4-1：キリスト教思想から見た環境と経済
- 4-2：聖書と環境思想
 - 1：創造論から終末論へ
 - 2：社会的構想力——モデル、ヴィジョン
 - 3：エコ・フェミニズム
- 4-3：聖書と経済思想
 - 1：経済神学と聖書 11/27
 - 2：契約思想の射程 12/4
 - 3：イエス、パウロ、黙示論 12/11
 - 4：賀川豊彦とキリスト教社会主義 12/18
- 4-4：現代神学の動向から
 - 1：プロセス神学 1/8
 - 2：政治神学
 - 3：科学技術の神学 1/22

<前回>社会的構想力、モデル、ヴィジョン

(1) メタファー論

- 4. 隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。
- 5. リクール：隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が頭わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

7. レトリックの諸形態と認知あるいは思考方法

隠喩（類似関係）—換喩（metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間）

—提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

8. 宗教的現実・実在（神の国）とはいかなるものか。

言葉の出来事（Sprachereignis, Wortgeschehen）→正典・靈感とは何か。動的靈感説。

上田光正『聖書論』日本基督教団出版局、1992年。

9. 隠喩が隠喩と機能するために→「個と共同体」をつなぐ理論構築（イメージとコミュニケーション）

・語用論：Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983. (『英語語用論』)

研究社出版)

- ・心理学・認知科学：芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』誠信書房、1990年。
山梨正明『比喩と理解』（認知科学選書17）東京大学出版会、1988年。

(2) モデル論

1. 言語世界／心的世界／実在世界（日常性・生活世界など）／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。

語／隠喩／テキスト：言語の諸階層 1 → 連辞

隠喩／モデル：言語の諸階層 2 → 範列

↓

- ・ syntagm (連辞) <metaphor-narrative> → パロール → 諸要素の結合規則とその構造
線的、連鎖的な言述順序。テキストは全体として連辞と見なされる。連辞内の諸要素が、前後の諸要素との関係でそれぞれの価値を獲得する。
 - ・ paradigm (範列) <metaphor-model> → ラング
特定の構造によって特徴付けられた体系内の他の諸要素との関係。テキストはこの体系に属する諸要素の部分的な表出。所与の体系に所属する諸要素の集積が範列。
2. モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩 (root metaphor) を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。
 3. Ricoeur, *Biblical interpretation*
Max Black, *Models and Metaphors. Studies in language and philosophy*, New York, 1962.
Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.
 5. モデルの特性として
 - ①モデルの複数性（まず現象学的に確認・記述され、次に理論的に＜存在論的に＞相互に位置づけられ関連づけられる）
 - ②モデルの複数性 → 神経験の複数性
モデル・レベルの非排他性・相補性（多様性の承認）と概念レベルの排他性
cf: 人格と非人格（ヒック）
 - ③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格（男性モデル）
 6. 神モデル：人格モデル / 非人格モデル
男性モデル / 女性モデル
王モデル / 父モデル
 7. 人間モデル（自然との関わりにおける）：「地の支配者」と「地の僕」
→ 人間の実践領域・倫理

(3) 社会的構想力

1. イデオロギーの三つの次元

現実の転倒としてのイデオロギー／正統化としてのイデオロギー／象徴的統合化・自己同一性としてのイデオロギー

象徴体系によって行動は媒介される、行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらず象徴体系を

現実（集団と個人の）を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力

2. ユートピアの諸次元

- ・ 病理としてのユートピア／批判としてのユートピア／可能性の領域を開くユートピア

- ・歴史的現実とは異なる現実（本来性？）を描き共有する能力

↓

「異端的」と呼ばれた民衆運動は何だったのか。

4. 信仰は究極的にはイデオロギーかユートピアかの二分法の拒否である。

自己同一性は信仰に基づく：「あなたの神である主を愛する」→「あなた」と「神」の相関性としての信仰。信仰は、自己同一性に形を与えそれを保持する、と同時に、自己同一性の転換を可能にする。

↓

終末論あるいは希望の弁証法：希望のヴィジョン
すでに、そしていまだ

↓

5. 自己同一性と自己変革（ミメシスの弁証法）

8. アーレントのカント論

Hannah Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy* (edited and with Interpretation Essay by Ronald Beiner), The University of Chicago Press, 1982(1992).

(4) キリスト教思想史の事例に即した研究

黙示文学、知恵文学、神秘主義・・・、民衆的異端運動

↓

エコ・フェミニズム

4. キリスト教思想と経済・環境

4-2：聖書と環境思想

3：エコ・フェミニズム

(1) エコ・フェミニズム——リューサーの場合

Dieter T. Hessel, Rosemary Radford Ruether,

Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans, Harvard University Press, 2000.

ローズマリー・ラトフォード・リューサー「エコフェミニズム——神学への挑戦」(97-112頁)

1. 問題提起：挑戦 (97-98)

- ・エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦である。キリスト教に焦点が絞られる。
- ・女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指す。

性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性：文化—象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）によって与えられるという連関である。

自然・物質・身体・女性

2. 支配関係の歴史的考察——神話からアウグスティヌス、近代まで(98-106)

1) 古代バビロニアの世界創世神話：母の支配する古い世界と都市国家の新しい世界秩序
ティアマト（母＝物質）とマルドゥク

- ・プラトンとヘブライ語聖書の創造神話

脱身体化した男性的行為者、世界靈魂→個別的靈魂

身体から発する激情をコントロールし知性を育む。

・キリスト教は靈魂の先在性や輪廻という考えを捨て去ったが、プラトンの宇宙論の諸前提を受け継いだ。『ティマイオス』を通してヘブライ語聖書の創造物語を読む。

魂：身体から分離可能な存在論的な実体

教父たちは、魂（洗礼を通してキリストへと贖われる得る）をジェンダー中立的なものと考えたが、女性的なものとしての女(women as female、罪への傾向性に近い)からは区別された。女は男性的な理性の支配に従属する。

2) 原初の平等とその喪失

・ヘブライの物語：神の像におけるすべての人間の平等という見方の基礎となり得るものであったが、後のキリスト教はこの方向性を取らなかった。男性が規範的な人間であり、女性は派生的。

・ヘブライの希望：元来は、パラダイスが回復される未来の時、地上的であり、可死性に拘束されている。

↓

ペルシア的終末論（ゾロアスター教）の影響、黙示的終末論。

・初期のキリスト教的運動の中には、あらゆる支配的關係からのキリスト教における解放を示唆するものが見られる。パウロのガラテヤの信徒への手紙3：28。原初の平等性。

しかし、家父長的な家族と政治秩序への制度化において、この徹底的な平等性は急速に抑圧されることになった。パウロ以降の動向。

・アウグスティヌスの女性従属論

女性的なものは劣った身体的な本性。女性が神の像において存在するのは、男性的なものと同じくすることによってのみ可能。エバの反逆。そこには、脆弱性からの逃亡の投影が見られる。

・ヘブライの思惟とギリシャの思惟を融合させた家父長的なパターンが、宗教改革を経て、近代にいたるまで、キリスト教の宇宙論、人間学、キリスト論、救済論を支配していた。

3) 近代、フェミニスト神学への流れ（省略）

3. エコフェミニスト的なキリスト教伝統の再構築にむけて(106-110)

1) 自己論（人間理解）

・プラトニズム的な心身二元論への挑戦

人間は長い進化プロセスの子孫であり、多様な有機体の諸レベルにおける物質—エネルギーの動態の連続性（無機的エネルギーから生命、生命の自覚、有機体における反省的自己意識へ）に基づいている。

ホモサピエンスの出現と支配・搾取。

スチュワードシップは、最初の命令ではなく、支配的男性の事後的な努力（乱用を正だし、よりよい支配者となる）。

反省的自己意識とは分離可能な存在論的な実体ではなく、脳—身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質—エネルギーの奇蹟・神秘にある。→ 自然科学との関連性

エコロジカルな自己意識：宇宙プロセスの全体を祝福し、我々の生命を地球共同体全体の生命と調和させることが必要である。これは、相互限定と交差的な生付与的はぐくみの靈性と倫理を要求する。

2) 悪と救済

悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。

ブラジルのエコフェミニスト、イボンヌ・ゲバラを参照しつつ、議論がなされる。

Ivone Gebara, *Out of the depth. Women's experience of Evil and Salvation*

(translated by Ann Patrick Ware), Fortress, 2002 (1999).

・悪は常に我々と共にある。

罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。

非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようとする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。

女性・身体・地球の支配とそれからの逃亡＝自らの否定された有限性の克服とそれからの逃亡

これが、歪曲のシステムを生み出す。支配と歪みのシステムが罪である。

↓

救済とは、歪みのシステムを廃棄することによって、そうすることによって、相互に命を与え合う共同性を期待できるようになる。

誤った逃亡主義から解放された終末的希望のヴィジョン

様々な悲劇の只中で豊かな喜びを共に享受すること、限界や過ちや事故をも等しく分かち合うこと。

罪（他者を犠牲にすること）とハン（Han、犠牲にされた者の痛み）に根差した逃亡主義的自己と救済史を破棄すること。

Andrew Sung Park, *The Wounded Heart of God. The Asian Concept of Han and the Christian Doctrine of Sin*, Abingdon Press, 1993.

3) 神・キリスト・啓示

・神論：神を男性的な支配階級の意識によってモデル化するのではなく、生命の内在的な源泉の生命の再生として描くこと。神は泉であり、母体である。

内在的な合理性を養う母体として三位一体（生命自体の基礎的な力動性の象徴的表現）を理解する。→種の多様性を祝福しそれらの相互関係を肯定する。多様性と相互作用における統一性。

三位一体的神とは、宇宙的、惑星的、社会的そして人格的な生命をはぐくみ贖う神であり、その名はソフィア、聖なる知恵である。

・キリスト論：英雄的戦士というメシア神話の問題性。復讐の乾きと結びつく。破壊の循環を再生産し、新しい犠牲を生み出す。メシア神話を転換しなければならない。

イエスは、それとは異なった預言者的人物であり、破壊の循環を突破しようとする。

平等な者の共同体の再発見への反メシア的な呼び出し。キリストとしてのイエスは、聖なる知恵を具現している。

・啓示：自然の内における啓示。自然という書物に照らして、歴史的聖書を読むこと。

↓

自然の両義性

自然は破壊的で悲劇的な顔を持っている。

単なる感傷主義は通用しない。ペリカンの二つの卵（マクダニエル）の残酷さ。

↓

持続可能性と正義（貧しい者への優先的配慮）という二つの命令に直面して。

二つの倫理の緊張関係において、両者の正しいバランスを取ることが必要である。

(2) エコ・フェミニズムからケアの倫理へ——マクフェイグの場合

Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

, *The Body of God. An Ecological Theology*, Fortress, 1993.

, *Super, Natural Christians. How we should love nature*, Fortress, 1997,

1. モデル→思想と倫理 (概念と実践)

・ 伝統的モデル

The Monarchical Model

The World as God's body

we have been given central responsibility to care for God's body, our world. (1987, 73)

The immanence of God in the world implied in our metaphor raises the question of God's involvement with evil. (74)

・ 神モデル

To say that God is present in the world as mother, lover, and friend of the last and least in all creation is to characterize the Christian gospel as radical, surprising love. (91)

All three loves --- creative, salvific, and sustaining --- are united in that each points to a desire for union.

Creative love (or agape), Salvific love (or eros), sustaining love (or philia)

Justice (agape), healing (eros), companionship (philia)

2. モデルに基づく生の形態化→実践

A Christian lifestyle modeled on God as parent, lover, and friend

The Love of God as Mother: Agape

The Activity of God as Mother: Creating, Sophia / Logos

The Ethic of God as Mother: Justice, an ethic of care, justice through care

3. 自然の神学：神学的な自然理解→自然観の転換

1) 新しい感受性へ：構想力 (Einbildungskraft) のレベルでの転換から、存在 (Sein) のレベルでの転換へ

A new shape for humanity, a new way of being in the world

We are as members of God's body qualified by the liberating, healing, and inclusive love of Christ. (1993, 197)

to change consciousness, to develop a new sensibility,

thinking differently, behave differently

each model contains within itself a way of being in the world. (203)

2) 創造の善性：人間から被造物全体へ拡張

My suggestion is that we should relate to the entities in nature in the same basic way that we are supposed to relate to God and other people.

We read in Genesis that God looked at creation and said: "It is good"---- not good for people or even for God, but just good. We should say the same thing. If we did so, we would simply be extending Christianity's own most basic model, the subject-subjects one, to nature.

(1997,1)

The ecological model says that the self only exist in radical interrelationship and interdependence with other and that all living and nonliving entities exist somewhere on this continuum. In other words, everything is in some sense a "subject" ---- an entity that has a center, a focus, an intention in itself, for itself (often an unconscious one), but it also at the same time in

radical relationship with others.

(2)

The basic model in the West for understanding self, world, and God has been "subject" versus "object." Whatever we know, we know by means of this model: I am the subject knowing the world (nature), other people, and God as objects.

nature has become the object par excellence. nothing but object (7)

hierarchical dualisms: male / female, straight / gay, whites / people of color,
Westerners / Easterners

The first named is the subject, the second the object.

Objects are "things" (8)

西欧ヒューマニズムの功績と限界、たとえばカント

3) 「自然」とは？ 自然の問題は自然観の問題となる。

If "Christian" has many meanings, "nature" has more.

there will be many views of what nature is, depending on different historical,
cultural, geographical, political, economic, and personal contexts.

In other words, nature is not one thing, but many things. (17)

nature is constructed by us. (20)

the big answer, the worldview

the medieval picture, the Newtonian view of nature, ecological model

the ecological, evolutionary
understanding of nature

the small answer, nature in the near neighbor

(23)

In sum, a Christian nature spirituality is Christian paraxis extended to nature. It is becoming sensitive to the natural world, acknowledging that we live in this relationship as we do also in the relationships with God and other people. It means extending the way we respond to God and other people --- as subjects and not as objects --- to the natural world.

as valuable in itself, as a "subject" (25)

subject-object & subject-subjects

4) 注意と愛

Simone Weil deepens the meaning of pay attention with her comment that "absolute attention is prayer."

We are asking the question, how should a Christian love nature? The answer emerging is that we must pay attention --- detailed, careful, concrete attention --- to the world that lies around us but is not us.

We must, as Murdoch says, try to see "the world as it is" in order to love it. To really love nature, we must pay attention to it. Love and knowledge go together; we can't have the one without the other. (29)

I would like to suggest that a branch of science, nature writing, can help us learn to pay attention. The kind of paying attention that one sees in good nature writing suggests a paradigm for us. Nature writing is not scientific writing that hides behind pseudo-objectivity; rather, it combines acute, careful observation with a kind of loving empathy for and delight in its object.

It is a knowing that is infused with loving, a love that wants to know more.

5) 二つの目（視線）のあり方

two very different ways of seeing the world (30)

Seeing Ellery and seeing the earth from space: behind these two very different ways of seeing. of paying attention, lie two different ways of knowing: what one commentator calls "the loving eye" versus "the arrogant eye." (32)

The arrogant eye simplifies in order to control, denying complexity, since it cannot control what it cannot understand. (33)

good for me and their human beings

The loving eye is not the opposite of the arrogant eye: it does not substitute self-denial, romantic fusion, and subservience for distance, objectification, and exploitation. Rather it suggests something novel in Western ways of knowing: acknowledgement of and respect for the other as subject. (34)

the distant eye, the arrogant eye, the eye that can objectify the world. This eye lies behind the Western scientific understanding of objectivity.

Feminists and others have criticized this view of objectivity, seeing it as a mask for Western male privilege as well as for technological exploitation of women and nature. (36)

practicing the loving eyes, that is, recognizing the reality of things apart from the self and appreciating them in their specialness and distinctiveness, is a critical first step.

it suggests a different basic sensibility for all our knowing and doing and a different kind of knowing and doing. (37)

6) ケア倫理：権利とケア

an environmental ethic of care

A rights ethic seeks to extend the rights accorded to human beings since the Enlightenment --- the right to "life, liberty, and the pursuit of happiness --- to all animals and even forests, oceans, and other elements of the ecosystems. A rights ethic functions on the model of the solitary human individual.

A care ethic is based on the models of subjects in relationship, although the subjects are not necessarily all human ones and the burden of ethical responsibility can fall unequally. The language of care --- interest, concern, respect, nurture, paying attention, empathy, relationality --- seems more appropriate for human interaction with natural world, for engendering helpful attitudes toward the environment, than does the rights ethic. (40)

It appears to be, for Jesus is reputed to have made the classical subject-subjects statement when he said, "Love your enemies." Treat the person who is against you, perhaps even out to kill, as a subject, as someone deserving respect and care, as the Good Samaritan treated his enemy in need. The subject-subjects model is counter-cultural: it is opposed to the religion of Economism, to utilitarian thinking, to seeing the world as for me or against me.

Christianity is not easy religion. (41)

(3) ケアの倫理

- Caring は、人間形成＝教育 (Bildung) の問題となる。
- Nel Noddings, *Careing. a feminine approach to ethics and moral education*, University of California Press, 2003 (1984).
- 川本隆史「ニーズを論じることとは、どんな人間のつかりを創り出すのか——公共性と倫理」(安彦一恵／谷本光男編『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、2004年。)